OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 19世紀の空間意識 : 空間的思考における装飾の作用について |
| Author(s) | 吉見, 貴子 |
| Citation | 大阪大学, 2009, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/49488 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【３】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 吉見貴子（よしみたかこ） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（言語文化学） |
| 学位記番号 | 第　２３０３８　号 |
| 学位授与年月日 | 平成21年３月24日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当<br>言語文化研究科言語文化学専攻 |
| 学位論文名 | 19世紀の空間意識－空間的思考における装飾の作用について－ |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教　授　金子　元臣<br>（副査）<br>教　授　北村　　卓　　准教授　山本　佳樹 |

## 論文内容の要旨

ドイツの建築家・建築思想家のゴットフリート・ゼンパーは建築理論において空間の問題を取り上げ、このテーマを広く紹介した。ゼンパーの言及によって、建築物と空間との関係性について考えるという視点が共有されるようになった。ゼンパーは「建てる」ことの前提として空間を囲い、分けるという動機が存在すると説く。彼の論の背景には、「空間的な囲い」を人間による自然界への対処法と捉える考え方がある。また、人間は囲われた空間に特別性を読み取ることから、移動の範囲や安全性の程度といった活動上の指針を得ていた。このような体験的な空間の認識には、１９世紀当時の都市の情勢が強く関与している。都市の様相の変化は空間を論題化しようとする動きに大きな影響を及ぼした。

イーフー・トゥアンは神話的空間、実践的空間、抽象的（理論的）空間と、三種の空間的属性のタイプが存在すると述べている。これらは重複の度合を変化させつつ体験的空間を構成し、その中心的な特性を決定する要素と捉えることができる。神話的空間では空間分節の方法は宗教的・超越的存在の信仰をめぐる価値体系に依拠している。神話的空間は概念的な図式としての性格を強くもつが、この図式内で農作業等の実際的活動が行われるという意味では実践的な空間でもある。両空間の違いは、後者の方が経済活動に関わる状況によってより限定的に定義される点にある。抽象的・理論的空間は人間が幾何学的パターンの認識を基に概念的な表象を具体化した場合の産物であり、建築的空間や計画的な都市などがこのタイプに該当する。貨幣と活字という媒体の文化の作用は知識や情報の流通性を高め、実践的空間を活性化する。実践的空間が充実していく過程で神話的空間は次第に希薄化するが、この段階は抽象的・理論的空間の実現を可能にするための準備期間でもあった。「都市計画」という語が創り出された１９世紀の後半には、抽象的・理論的空間を大規模に実現しうる技術力が蓄積されていた。パリとウィーンは理論的な「計画」に基づいて構築された都市の代表例である。

都市像を理念的・抽象的に想定する姿勢が現れ始め、またそのような都市の編成を推進する経済力と技能が蓄えられていた頃、ミクロな生活の領域における空間意識は衰微の傾向にあった。１９世紀に人々のあいだで流行していたのは華美な調度品の収集であり、空間的な統一性よりも装飾の充実の方が優先されていたのである。個々に華やかなデザインを施された家具は互いに調和せず、結果的に空間の全体性が損なわれるようになる。加工や複製等の工業技術の発展により、装飾品や装飾的パーツは１９世紀を通じて大量に生産され続けた。装飾の流行が家具類の中心的な意匠を決定することになり、それらのデザインの「過剰さ」について様々な議論がなされたが、この現象は空間への関わり方の問題と密接に繋がるものであった。また、建築の分野でも貴族風アパートメント・ハウスのような装飾的な建物が好まれるようになっていた。当時の装飾品の氾濫状態には、実践的空間における物流の形態の変化が作用している。制約なしに入店できるデパートやバザージュ等の施設が増加し、新商法が次々と開発されていく中で、「買い物」という行為は大衆化の傾向を見せるようになる。交通機関の発達や大型商業施設の「薄利多売」志向等の条件が重なり、自由な「買い物」は特権的な行為ではなくなりつつあった。装飾品はこのような状況下で、多くの人々に娯楽的に消費されていたのである。

ジークフリート・ギーディオンは１８８０年ごろに装飾物の混交状態が極まったと述べているが、ほぼ同時期に「新たな様式」を求めるいくつかの美術運動が起こった。ムーヴメントを形成した人々は、工業技術の進展に関しては個々に見解を異にしていたが、物の形状への意識において共通する部分を持っていた。彼らは従来の様式の混合によるデザインが、１９世紀末という社会の変動期になされるべき表現にはふさわしくないと判断したのである。アール・ヌーヴォー運動に代表される「新たな様式」の探究は、物同士の平穏な共存を実現することを目指した。このような共存の状態が場の空間的体験を準備するものであるなら、複数の美術運動は空間性の回復を目的としたムーヴメントと解釈することが可能である。「新たな様式」の創出を通じて空間的な体験を取り戻そうとする試みは、産業化の勢いによって生み出された不安定な社会状況のもとでなされた。家具や小物を蓄えた室内空間では多様な装飾表現が展開されるが、この部屋と装飾の強い関係は、空間の体験についての一つの視点から説明することができる。それは都市環境の激変という事態に自らを適応させていかなければならない人々が、疲労を癒すために「避難所」としての美的な室内の確保を望んだ、という捉え方である。１９世紀には様々な文筆家によって「部屋」に関するテクストが生産されている。これらのテクストにはしばしば「調和的な室内」についての言及が見られるが、こうした内容は避難所的な空間体験への関心の高まりを表している。

ゼンパーは建築論の中で空間的な事柄を問題化したが、空間の構成が（「新たな様式」の模索を経ても）なお装飾的な表現に依存していることに危機感を持っていた。ゼンパーは同時代の美術の潮流（新古典主義建築の流行、歴史的様式の折衷）を批判し、建築物における機能と外観の関わりについての問題提起を行った。彼は「実用性」の概念から空間を解釈しようとする姿勢を示したのである。ゼンパーの思想の影響下にあったオーストリアの建築家アドルフ・ロースは、装飾の問題に対する積極的な言及を通じて独自の美術論を展開した。ロースはアール・ヌーヴォー期に提案された家具の様式が一定しないことを指摘し、ゼンパー同様、製品の形状の不安定性は機能への眼差しの欠如に起因すると考えた。彼は装飾物の付加ではなく、それらを削ぎ落とすことによって実現する様式の可能性を説いた。また、ウィーン市の改変に重要な役割を果たした建築家オットー・ヴァーグナーは、空間的構成についての思考を一

つの都市全体に適用しようと試みた。ヴァーグナーはゼンパーからもたらされた空間への意識をいっそう大きな規模で活用することを検討した。彼の解釈では、通行者に与える違和感や刺激を最小限に抑えたフラットな空間性こそ、近代的な行動様式の展開に求められる条件であった。彼は流通の支障とならない等質的な空間の在りようによって、効率性という価値観を説明した。均一性は近代都市におけるスピード化された生活環境を表すための、有効な建築言語となった。人工的・理論的に構築される抽象的空間の中でも、特別な象徴作用を担うことのない脱表象的な抽象空間の創造が促進された状況の背景には、ヴァーグナー的な交通空間の捉え方が働いていた。

折衷式の装飾の流行は人々に空間性の在り方を熟考させる契機となっていた。ナポレオン１世時代に発するアンピール様式やドイツのビーダーマイアー様式は当時の混合的な装飾の姿を良く表している。これらの物品は「消費の娯楽化」の過程で「キッチュ（Kitsch）」の概念とともに受け入れられていった。物の複製と量産に対する融通性が大型商業施設の成立の前提であったが、それが実現されるようになった時、人間の生活は「模倣性」「装飾的・余剰的な性質」を指すキッチュ的概念と密接に結びつくことになった。キッチュ的装飾品の氾濫に反対した論者達にとって、「統一的な美観の有無」は人間の存在様式そのものに関わる事柄であった。かつては宗教的内容が一種の了解事項として人間の生活を規定していたが、彼らは信仰に代わる「認識の枠組み」を芸術の分野に見出そうとしたのである。しかし「均質的な空間」の提案にまで至った空間論的視点は、批判の対象であったはずのキッチュと類似的な性質を覗かせる。心地良さを叶えるためのキッチュ的個室は明確な表現の方向性を持たないが、均質的な空間も同様にそれを欠いている。利便性の向上を掲げる均質空間もまた、意味の伝達ということを前提としない空間である。両者は消費社会化の潮流を背景に、ともに表象性を欠いた状態で並存していた。

都市生活に大きな変化をもたらした機構や物品の多くは１９世紀末に生み出された。具体的には量産体制の一般化、電気照明の普及、交通・通信技術の発達等の事象が挙げられるが、これらの出来事は都市の外貌に作用したばかりでなく、人間が周囲の環境に接する時の経験の仕方自体にも影響を及ぼした。装飾趣味と空間的議論の出現はどちらもこの変化の経験の反映である。「理想的個室」の創造は計画的な近代都市からの退避の手段と捉えられていたが、両空間には散漫で希薄な表現性という共通項が存在していた。キッチュ的な装飾世界と均質空間論が示す脱表象的な性質は、以降の都市の在りようを考察する上で重要な概念となっていくのである。



## 論文審査の結果の要旨

本稿は、１９世紀におけるテクノロジーの発達が都市「像」の変容をもたらし、それが「空間」をめぐる様々なトピックを生みだしていくという現象を解釈するという立場で書かれたものである。本稿の第一の意義は、「文化史」「美学史」「デザイン論」「建築」など従来の他領域における成果を「空間」というテーマに視点をおいて総合し、その意味を現象学的・解釈学的に明らかにするという試み・テーマの斬新さにある。同種の論究としては例えばアンリ・ルフェーブルの『空間の生産』（1974）がよく知られているが、、従来この分野の研究の多くがそうであるように、同研究はどちらかというと「空間」への社会学的アプローチとなっているのに対し、吉見論文は文化史的視点からのアプローチとなっている点が評価されるところである。その結果ルフェーブルではテーマ化されていない、例えば「装飾」と空間の問題等が取り上げられ、作り出される空間と生活世界との関連が論究されるようになっている。本稿の意義の第二点は、第一の意義と深く関連していることであるが、１９世紀後半ヨーロッパにおける「都市計画」の発生の結果作り出された、大規模な技術力の蓄積を背景とした「理論的・抽象的空間」がもたらした「空間構成の方向性をまとめる理念を持たない脱表象的抽象化のパターン」が、他方で内部空間－「個室」「私的空間」－における細部やニュアンスにおける差異への構成意識をもたらし、それが例えば家具や室内の「装飾」の再構成を生みだす様子を、空間に住まうものによって書かれた文学テキスト等を使いながら明らかにしたことである。そして第三の意義としては、こうした都市における「均質空間」の創出が、衛生・健康・人口といった人間の生活世界における「生」原理による管理機能を強化するという「生政治」的状況を背景にして構成されていく様が明らかにされたことである。例えばアール・ヌーヴォーやドイツの田園都市運動、芸術と科学の統合という１９世紀的運動における「空間」にかかわる現象の解釈・意味がこの視覚から論じられた点は、近年の文化史における新たな視点を「空間」というテーマに適用したものとして注目される成果である。

他方掲げたテーマの大きさからいって論述の分厚さに物足りなさ、不十分さを残した点は、矢張り問題である。論理的記述を重視する姿勢は理解できるものの、もう少し細部について細かく丁寧に論じる必要があると思われるし、掲げられている図版についての言及も詳細にすれば分量的にも納得のいくものになったと思われるにもかかわらず見過ごされた点は残念である。さらに既存の成果を使いながら新たに再構成するという場合、どこまでが従来の知見であり、どこからが新たな知見であるかを明確にしておく操作が必要であるが、それが不分明な箇所が見られる点も改善されるべきである。しかし全体的に見てこれらの点も、本論考の価値を損なうものではなく、先行研究が決して多くはない分野での成果として十分価値があるものであるのはいうまでもない。

審査の結果、本論文は（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるのであると判定した。